

島尾敏雄

著者略歴

岡田啓（おかだけい）

1935年 岐阜市に生れる。

1957年 岐阜大学国語国文学科卒

1962年 『過渡』発行。

1963～67年 『あんかるわ』同人

現在 『有時』主宰

現住所 岐阜市長良有楽町9

島尾敏雄 深淵叢書1

1973年9月20日初版発行

定価 1000 円

著 者 岡 田 啓
発行者 前 島 幸 視
発行所 国 文 社

東京都豊島区南池袋1—17—3
電 話 東 京 (987) 2865—6
振 替 口 座 東 京 195058

乱丁・落丁本はおとりかえいたします 高長印刷・並木製本

島尾敏雄

島尾敏雄

目次

「川にて」へのノート

11

疑わしさの対象としての「私」

27

飢えと乾き

32

——長篇『實學生』を軸にして

初期の三作品にふれて

51

内的時間性について

70

〈小説〉的意識の暈

94

耳の内部での崩れ

109

——「摩耶たちへの偏見」を読む

内的空間性について

119

〈体験〉の咀嚼とは何か

129

〈深淵〉にて I

142

〈深淵〉にて II

——吉本隆明の所論を媒介にして

島尾敏雄と夢

187

非へ小説の意識の暈

204

帰魂と表現

208

島尾敏雄略年譜

233

あとがき

241

参考文献（抄）

244

初稿発表之覚書

246

157

島尾敏雄

「川にて」へのノート

島尾敏雄はいつも何かを確かめながら、己にとっての下降を試みている。日常の何でもないやりとりの襲の中に、彼だけの視えない空間があり、島尾はそこからのびてくる幾つもの触手にふれたりふれられたりして、己にとっての世界を紡いでいる。しかし、それは自分がふれるものに容易になじめる、ということを示してはいないのだ。案外に大様であり、彼にとってのある傾斜の上にかぎりは比較的たゆとうことの好きな様でもある。ただ島尾に目立つのは、感受することと受容することの間に乖離があり、彼がその狭間に特別な興味を示すことだ。もっとも、これはこうも云ってみるといっただけの話ではある。何故なら、今一步島尾の内部に踏み込めば、それとはまた逆の形、感受即受容とも言える面があるからだ。島尾の内側に何かの崩壊といったことを想定すれば便利な様である。女がアナタはしようのない人だとか、もうアナタには頼れないとか、信用できないとか言う時にそのことばに籠める或る遣る方ない何か、平たく言えば男の或るA規範Vの崩壊といった様な何かを。それがあから、その結果としての現実に存在すると

ころの遣る方ないものほとんどが受容できる、言いかえれば、解ってしまうことの解らなさ、疑わしさが島尾にある。とにかく、乖離と言うよりは全的受容（そんなことはありえないからそれ故のある種の崩壊）に対する全的疑懼と言うか、根源的に疑ってゆくと言うか、そうしたモチーフが島尾にあるのは確かのように思う。

ここでは、主に「川にて」（『現代批評』5／昭和三四年一月）を追ってみたい。まずはじめの部分を引用する。

岬に行きたいと思った。そこは小さな島だが、とにかく土地の終末のところが見たかったからだ。Qに案内をたのむと彼はすぐ承諾した。風が出ていて、思い出したように霧雨が通りすぎた。ゴム長靴を借り、雨衣を着た。門口を出たところで、岬に行く前にちょっと川を見たいんだがと私は言った。「そうですね、じゃ、ゆあみをして行こうか」と彼は心得顔でそう言った。川とゆあみとどう関係があるのか分らぬままそこで私は「うん」と気軽に返事をしたのだが、しかしそのとき、川がゆあみ場でもあることを、潜在的なことを問題にしなければ、私は知っていたのではない。

写していると先へ先へとことばを追いたい誘惑にかられる。島尾特有のくねり方をして一つの文章はあとさきの文章と微妙にからんでいる。岬に行きたいと思って案内をたのむのが、川が見

たいということになり、川はすぐにゆあみ場へと変容する。それは単に川が岬への過程にあり、またそれが「水汲み場であり洗い場であってゆあみ場でもある」川だということにとどまらない。この作品の中で、島尾は彼の方法とも読めそうな「感じとることはそれほどむつかしくはない。本当に困難（困難の誤植だろうが、『島尾敏雄作品集』3の初版でも五刷でも直されていないのでこのままにしておく・岡田）なのはそこだと感じとった場所に『近づく』ことなのだ。」ということを書きつけているが、こうしたくねり方自体が彼の場合には一つの△中心Vへ「近づく」体を示している。「川にて」という彼におけるエチュードが「岬に行きたいと思った。」という直截な表現ではじまりながら、すぐに屈折して行くのもその所為である。「川がゆあみ場でもあることを、潜在的なことを問題にしなれば……」これは島尾が「潜在的なことに」特別の△傾斜Vを示す一つの現れである。男女混浴の場を見たいと言ったかのうしろめたさ、それを島尾は「罪の意識」といったところまで引きのびしながら或る△中心Vへ向っての下降を試みる。話としては、川へ行き、ゆあみをして帰るといふだけのことであり、行く時には帰ってくる者に、帰る時には川へ行く者に出会う。それは全く行き会うというにすぎない。ただゆあみ場で老人の一人二人が「あなたは、どこからおいでた？」とか、「町方の人がこのようなところに何のために来なさるのかね」といった「意図のぼんやりした質問」をしかけてきたのが作中の「私」への働きかけとしてあるだけである。

とすると、この作品はどうなるのか。また「川」とは何か。「島」は島尾の住んでいる「南の

島」の装いで描かれている。「部落」は閉鎖的であることで生活の原始的なものを内蔵している。そして「川」は——「島の中のどの部落も、ただ一箇所だけ水の出る場所があり、それを川とよんでいた。川といつても、地表に延々と露出した水の帯の横たわりのイメージを描いてはあてはまらない。島の中では水脈はみな地下にもぐっており、ここで生活する人々はそれをさぐりあて、どこか一箇所だけをあらわにして川と名づけた。『さぐりあてる』というよりは、風雨に侵触されてなにがしかの作用を受けてでき上がった大きなたて穴のような凹みを『利用した』と言った方がいかもしれない。」ものとしてある。

島尾の住んでいる「南の島」にこの作品にあるような「部落」があり、また「川」があるかどうかは私の知るところではない。

だが、島尾の次のような文章を見ると、この「島」「部落」「川」および「川にて」のような体験が、島尾の幻覚でも小説的仮構の世界でもないことを推察することができる。島尾は「奄美大島に惹かれて」という小さな文章で、「初め若くて未熟な私の眼に、奄美大島は一個の遊仙窟であった。(中略)私はさながら仏教や儒教の倫理観に影響されぬ太古を現世紀に垣間見たと思つた。そして十年の歳月が流れた。今奄美大島は私にとって既に異郷ではないし単なる太古でもない。(中略)それには生活と歴史と思想とが厳として裏付けされている。」と書いている。(註記・この文章は昭和三十一年一月に書かれたもので、『離島の幸福・離島の不幸』に収録されている。)また、「部落のかたち」という文章では、「奄美の主島である大島の部落の目立った特長を言う

とすれば、それははなはだ孤立的なことにあるだろう。島のすべての部落にあてはめることはできないとしても、そのほとんどが海端のせまい三角地帯に人家を密集させていて、となりの部落に行くには岬のまがりくねった道や峠を越さなければならず、その間には一軒の人家も見つけないので、大島の一般的な景観である。いづれにしても島とは思えぬほど山々が重なり、ひらけた平野など見ることができない大島の地勢のなかで、ほんの猫額ほどのデルタに茅ぶき屋根の寄り集まった集落を認めたとときの、気持のあたたまってくるおどろきは、いわば仙境のイメージにかやうものであった。部落の象徴のような土着の信仰と結びついたせまい広場や、気根の錯綜した榕樹のすがた、そして女たちの群れつどう川の親密なにぎわいがそれをいっそう助けていた。部落の顔や部落の举措が、となり部落と区別できるほどそれぞれの部落に特有の個性をあたえ、血縁の要素とともにその孤立性を深く支えていた。」と書いている。(註記・この文章は昭和四十年に書かれたもので、『島にて』に収録されている。) 島尾がここに書いている奄美大島の△現実▽は、島尾のそれへの驚きをも含めて、作品「川にて」に通うものだ。恐らく島尾は己にあった△体験▽をなぞっている。従って、作中の「私」は島尾自身と重なるものとして読める。だが、私たちが作品に向う時、ここはつながって切れているのだとしなければならぬ。奄美大島という一個の島は島尾の主観の外に「敵として」存在している。だが、「川にて」のそれは、島尾の内なる「島」「部落」「川」としてあるのだ。それは作者が或る地点へ近づいたために拵らえたものだ。要は島尾が△書く▽という行為によって自からの文章におくり込んだ(島尾